
学校～夕～

ありすきゃろる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学校〜夕〜

【Nコード】

N3346I

【作者名】

ありすきやろる

【あらすじ】

学校の放課後。ある噂を聞いた、少年達。興味本位で始めた。取り返しのつかないことになるとは思わなかった……。。

(前書き)

学校の怪談です。

彼は階段を上っている。

場所は学校。外では、太陽が沈みそうで沈まない夕暮れ時。校舎を
紅く染め上げている。日中の学校より恐ろしく、夜の学校より妖し
い。
危うい時間帯。

そんな中、彼は一人階段を上る。俯きながら、一段ずつ黙々と上る。
なにか考えがあつて上っているのか、ただ上っているのか、それさ
えもわからない。

ただ、上っている。

そう、上り続けている。

彼は、気づいているのだろうか。すでに、彼は有り得ないほどの階
段数を上っている。ここは四階建てのはずだ。本来なら、屋上に辿
り着いていないと行けないはずなのに・・・

彼は階段を上っている。

彼が、いつから上っているのか。

彼が、どこまで上るのか。

彼が、いつ階段を下りられるのか。

それは、誰も知らない。

彼は、階段を上り続けている。

「ねえ、やってみようか」
この言葉が始まりだった。

彼らは図書館で、怪談話をしていた。放課後特にやることもなく、彼らは図書館に集まっていた。気づいたら怪談話になっていたのだ。一人ずつ怖い話をしていき、この学校にまつわる話になった。よくある七不思議の噂だ。人体模型が走る。飛び降り自殺した生徒の幽霊が出る。銅像が走る。そんな中、こんな話があった。

「夕暮れ時に一階から四階まで階段を一段ずつ上がっていると、何かが起こる。上っている間は後ろを向いてはいけない。数人で行う場合は一列に並ぶ。途中でやめることはできない。

破れば、死ぬ」

その話がでたのは、ちょうど夕暮れ時。そろそろ帰ろうかと考え始めていたころだった。

「ねえ、やってみようか」

その話を言った少年が笑いながら、そう言った。なかなかいい考えだった。こんな話をしているくらいだから、彼らは興味があった。

それに、このまま帰るのもなんだかつまらなかった。

賛成の声が上がる。そんななか・・・

「やめておこうよ。死んでしまうかもしれないよ。」
と、別の少年が言った。懸命な判断だった。

しかし、その発言に賛成するものはいなかった。

何が起こるか、皆気になっていた。

「大丈夫、こんな作り話だよ。死んでしまうなら、この話を広める人もいないはずさ。」
最初に言った少年が言う。確かに、体験した本人が死んでしまったら伝えることはできない。
反対した少年は渋々参加することに決めた。

彼らの中で、この話のおかしさに気づいたものは一人だけだった。

他の七不思議は、どれもどこかで聞いたことがあるような話だった。この話だけ聞かない話だったし、やり方まで語られていた。具体的だった。なのに、由来は一切なかった。

結局、彼らはこの話を信じてはいなかった。ただ、みんなとなにかをするというのが、楽しいだけだった。そのことは悪いことではない。ただ、愚かだった。

本人が死んだら、伝えることはできない？他に方法なんて、いくらでもある。

彼らは、身をもって知ることになる。

夕暮れ時、それは一日で一番危うい時間

一階の階段の前に、5人の少年がいた。皆先ほどとは、違い静かだ。実際やるうとすると、信じていなくてもやはり怖い。夕日に染まった校舎は、それだけで不気味だ。

彼らは話通りに、一番前に言い出した少年。一番後ろに反対していた少年がついた。

「じゃあ、はじめようか。」

そう言って、階段を上り始める。一段、一段踏みしめる。

「あっ」

後ろから声がした。その声は反対していた少年のものだった。その声を聞いて、上るのをやめる。

「どうした？」

返事はない。

いやな空気が漂う。誰も後ろを向くことはない。一番前の少年が上り始める。それに続いて皆上り始める。

二階に着いた。彼らは、人数を確認した。確認するまでもない。

4人だ。最後尾にいた少年の姿はない……

誰もしゃべらない。

「きつと、怖気づいて帰ったのさ。」

一人がそういった。彼らは、そう思うことにした。

また、彼らは階段を上り始める。

一段一段しつかりと。自分の足場を確かめるように。

彼らは後悔していた。これからどうなるか不安だった。

彼らは悔やみながら階段を上る。

肩を叩かれた。

彼は、振り向いてしまう。

後ろを振り向くまで数秒の間。彼にとってはとても長く感じられた。

彼は、その数秒で気づく。

自分は、最後尾で階段を上っている……

後ろを振り向いたら、死ぬ。

その後、彼は階段で倒れているのを発見される。死因は、心臓麻痺。

その顔は、異様なほど笑っていた。

三階に着いた。人数は3人。

最後尾にいた少年はいなかった。

「もう、俺は帰る。」

一人が、そう言っただけ階段を走って下りる。静止の声も聞かず彼はいなくなつた。

上るはずの階段を彼は下る。

彼は、思い出さなかつた。

いや、考えないようにしていた。

途中でやめれば、死ぬ。

彼はその帰り道に死んだ。交通事故だ。ふらふらと道路に出てきて、轢かれた。その顔は、やはり笑っていた。

「今度は僕が後ろにつこう。」
最初にやろうと言つた少年だ。

そして彼は、最後の階段を上り始める。

一段一段ゆっくりと上る。自分がいる場所を確かめるように。彼はもう何も考えていなかった。

今なにが起こっているのか。いなくなつた3人がどうなつたのか。

そして、自分がこれからどうなるのか。

何も考えない。ただ、階段を上り続ける。

彼は、気づいていない。周りの風景が全く変わらないということに。夕日が沈んでいない。先ほどと全く変わらず校舎を紅く染め上げている。

夕日が沈むのは思っている以上に早い。でも、全く沈まない。

まるで、世界から切り離されているようだった。

しかし、彼は気づかない。

ただ、俯きながら階段を上り続ける。

四階につく。

彼は、後ろを見る。

そこには、一人の少年がいた。

少年は、笑いながら言った。

「馬鹿だね」

笑いながら、彼は消えた。

そして、一人だけになった。

彼は、ようやく気づく。

夕日が沈まないということ。

後ろにいたのは、自分の知らないものだったということ。

四階建てのはずなのに、五階に続く階段があるということ。

そのことにようやく気づく。

しかし、もう遅い。

彼は、階段を駆け下りようとした。

しかし、下りることはできなかった。

下りようとする、不思議と下りたくなくなるのだ。

彼は、階段を駆け上った。

上っても、上っても、階段が続いている。

彼は、階段を上るのをやめて、階段に座り込んだ。

しかし、またすぐに階段を上り始めるだろう。

彼が出来ることは、階段を上るということだけだから。

唯一、階段を上り始める前に気づいた少年は、無事だった。彼は、気づいたときに理解した。あの話が本当の話だということ。他の3人はもう始めてしまっている。今止めても彼らは死んでしまおうだろう。

四階につけば大丈夫かもしれない。そう考え彼はずっと玄関で待っていた。

日が沈んでも誰も来なかった。

夕暮れ時、数人が集まり話をしている。

少年は、笑いながら言う。

「夕暮れ時に一階から四階まで階段を一段ずつ上がっていくと、何かが起こる。上っている間は後ろを向いてはいけない。数人で行う場合は一列に並ぶ。途中でやめることはできない。

破れば、死ぬ」

「ねえ、やってみようか。」

(後書き)

はい、学校の階段でした。
いかがでしたか？

都市伝説ですね。増える階段。増える校舎。

学校くたくでした。

夜と朝も一応なくはないですが、これが一番うまく書けました。私的にはね。

気が向いたら、投稿しますね。

あ、他の作品もよかったら読んでみてください。

コメディっぽいものがあります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3346i/>

学校～夕～

2010年10月8日21時39分発行